HAGI 萩

題字は吉田松陰筆跡

おかげさまで 1996－2016 20周年 20th ANNIVERSARY

SUMMER ISSUE 2016

80

清野耕一展　Cultivation/Between Heaven and Earth（培養体／天と地の間）

会期：平成28年（2016）4月7日［木］～平成29年（2017）3月26日［日］

制作：2016年　技法：ミクスト・メディア(木版ベース)、インスタレーション　素材：キルト芯、油性インク、糸、ビーズ、フェルト、ハードボード、発砲ポリスチレン、紙粘土、他

HAGI URAGAMI MUSEUM

生の界面を摺る

―清野耕一「Cultivation/Between Heaven and Earth（培養体/天と地の間）」に寄せて

石﨑 泰之／当館学芸課長

強烈な色彩と奇抜な模様で存在を主張する大小の円盤。あでやかな円いかたちのそれぞれは、弾性繊維（キルト芯）の支持体に、版木に刻んだ模様（凹版）をプレス機で摺り重ね、それを円形に切り抜いた板面にふわりと被せて、素材の温柔さを損なわないように注意深く縫い付けたものです。肉厚な中央部から周縁部に向かってなだらかにひろげられた円形の版画は、支持体の表面ばかりか内層に摺り込まれたインクがマチエール（材質感）をあらわし、繊維の復元とともに立ち上がった模様どうしが立体的に重なり合って見えるなど繁縟な様相を呈しています。さらに円盤のいくつかには、真珠のようなビーズが水面に浮かぶ泡沫のように散らされたり、また別のいくつかには、二色ないし三色の色糸が巻き付けられた卵形がその中心部に据え置かれるか、天井から垂れるビーズ付きの蛍光色の水糸の端に結ばれて添えられたりしているのです。

清野耕一は、このインスタレーションで、「生命のサイクル：誕生―成長―死―再生」を示唆的に表現しようと試みたと述べています*。なるほど、茶室に展開するこれら多彩な作品（作家は、これら大小の円盤や卵形、色糸、ビーズをエレメント〈要素〉と呼びます）は、色の響き合いをアクセントに相互の関係性の複雑さを増幅させながら糾合し、四畳半の茶室に人間本来の旺盛な生命力を表徴する一つの祝祭的空間をつくりだしています。かれは、世界の始原を彷彿させる賑々しいカオス（混沌）の表象をとおして、私たちが幻想する統一的なコスモス（宇宙）の真相を手繰り寄せてみせているのです。

それは色やかたちのほかに、かさかさと乾いた肌合いや量感、濃密さ、そして重さといった触感を視覚的に明示することで、この世界を創造する仕掛けの初動ともいうべき、生の深奥に潜む複雑系と多様性への畏敬の念を象徴的に吐露していると理解して良さそうです。ここに、たとえ感じ取れないほどの重みでありながらも、熱を帯びた生命の鼓動に対してつねに慈愛に満ちた眼差しを向けつづけてきた、この作家の腹中の赤心がしみじみと伝わってきます。

ところで、四畳半茶室にひろげられたものが、茶の湯とは無縁のものつまり専用の茶道具ではない場合、当然ながら、この四畳半の建物空間は茶事を行う機能をもった茶室として成立はしません。

しかしながら、いったん四畳半茶室の建物空間に置かれたこれら（ここでは清野のあでやかな作品群）は、構造や形態、色彩、質感などといった造形要素をよすがとしながら、茶道具が本来備えている、工芸性という観点から捉えられていく傾向があります。これは、私たち日本人にとって茶室という建物空間が、美術館や画廊の展示スペースのように多種多様な展示活動に対応する間性的空間ではなく、茶の湯にとっての専有の場であると了解してきた、いわば伝統的な認知力によって練り上げられた感性を身に付けているからでしょう。もちろんそのようなものの見方には個人差があります。観る人が茶の湯の世界にどのくらい関心を抱いているかによって、ものの見方やその読み取り方に浅深も生ずるはずですが、一般には伝統的な茶の湯のしつらい（室礼）との比較から、違和感を覚えながらも道具にあらざるものをかなり丁寧に観察するのではないでしょうか。

逆説的に聞こえるかも知れませんが、この習い性ともいえる私たちの「読み替え」行為によって、茶の湯とは無縁にみえるものが置かれた四畳半は、かえって茶の湯という芸能の特質ともいうべき、行為主体としての人間の生が強く意識される空間として立ち現れてくるといえるのです。

さて、四畳半茶室のそこかしこを占めるこれらのもの（作品）のかたちとあでやかさは、予想外にもかえって空間の隅に宿る湿り気を帯びた陰翳を強く意識させずにはおきません。このインスタレーションを眺めるうちに、私たちは仄かな暗がりをも包む大気、とりわけ水を感じさせるような優雅な「生気」で満たされた空間が表象されていることにも気づかされます。

これまで版による表現技法で自己をかたちにしてきた清野耕一は、今回もあでやかな木版画の一つ一つに「生命のサイクル」の象徴を力強く摺り上げましたが、一方でこれらの四畳半空間でのインスタレーションは、茶室空間に宿った「生気」を支持体に、きわめて敏感な界面にうつろう生の関係性への想いの遍在を摺り上げたといえるのです。それは、茶事の背後に控える過去や現在そして未来の人生つまり時間を超えて感得できる数多の個性的な生き方を尊重する思念の表現であり、なによりも作家自身の生に対する核心的現実なのでしょう。

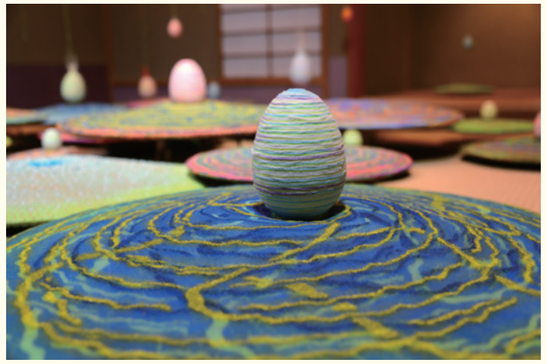
この作家の思惟の対象としてのこのインスタレーションは、なぞるように見入り、その意味を読み解こうとする眼差しに対して穏やかに開かれているのです。

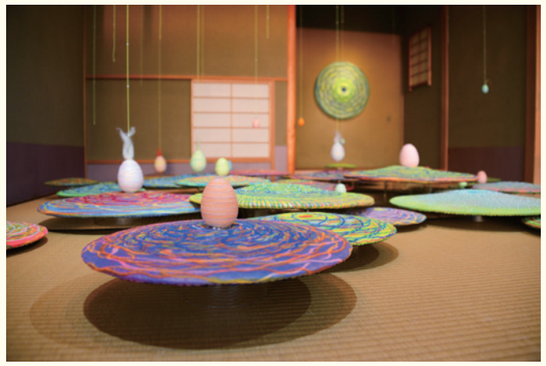
*清野耕一「出品作品について」（茶室展示リーフレット）

清野耕一展

Cultivation／Between Heaven and Earth（培養体／天と地の間）

平成28年(2016) 4月7日[木]～平成29年(2017) 3月26日[日]





特別展示「最初の人間国宝 石黒宗麿のすべて」

宗麿（ぜいたく）の贅沢貧乏

小野 公久／日本陶磁協会萩後援会長

大阪の朝日放送取締役だった守屋篤太郎は、旧制北野中学時代から宗麿の元へ通った変わり種である。早大在学中に大阪へ帰省する途中、京都・蛇ケ谷（じゃがたに）の宗麿宅に立ち寄った。昼間だというのに、宗麿、とう夫人は浴衣姿で並んで眠っている。守屋は良く寝る夫婦だなあ、と感心しつつ「貧者の一灯です」と余った学資を差し出した。とたんに2人は跳ね起き「肉だ、豆腐だ」と買いに走り、忽（たちま）ち盛大なすき焼が始まったという。寝ていたのは空腹を紛らわすためで、ヘソの辺りには飢えを凌ぐオマジナイか、五銭銅貨が貼り付けてあったそうだ。熱烈な宗麿ファンだった奈良在住の陶芸家久岡冬彦から聞いた話である。恐らく昭和8、9（1933、4）年頃のエピソードだろう。守屋は退職後、西宮で蕎麦屋を営んだ。その店の器を作ったのが久岡である。

八木一夫も、飢えに耐えかねて、道端で拾った素麺を食った話[注1]を紹介している。宗麿が顔を顰（しか）めて「酷く不味かった」と往時を語ったという八木の描写が、何とも可笑しい。

宗麿は、昭和3年春から11年夏まで蛇ケ谷で暮らし、そのあと終（つい）の棲家（すみか）である八瀬へ移った。7年と9年の5月には大原孫三郎に招かれ、倉敷市の新渓園のさつき会バザーで個展を開く。9年の売上は513円[注2]。「一升の米を得る為に一日中かけ廻って歩いて仕事が出来なかった日は 茲（ここ）十年間幾百度と知れずあったのです」「これから戦ハ仕事丈（だ）けに集中します ほんとうに忘我の境に入れることハ喜しい 仕事の最中に耳元で米だ味噌だと聞かなくてもよい」。個展終了直後に、宗麿は親しい友人にこう喜びを書き送っている[注3]。

宗麿は蛇ケ谷に移り住む以前の大正12（1923）年9月、東京で関東大震災に遭遇。陶芸で暮らしを立てようと決意して埼玉県小川町に移住し、2年余り暮らした。この時代が最も貧しかったと、親友の小山冨士夫が書いている[注4]。如何しても暮らしが立たず、とう夫人が新橋へ芸者に出たが、幸い借金を肩代わりして呉れる人[注5]が現れ、座敷に出る前に家に戻れたそうだ[注6]。夫人は結婚以前、名古屋にあった鶴屋の名妓だった。

極貧の小川時代に面倒を見たのは、地元の老舗料理旅館二葉の11代店主八木忠太郎である。八木によると、サツマイモで飢えを凌いでいた宗麿は知人から汽車賃を借り、東京・下根岸町で内科医をしていた養父伯の元へ借金に出掛けた。意気揚々と帰宅した時、手にしていたのは英国製の猟銃だったという[注7]。

蛇ケ谷時代の似た逸話を小山も書いている[注8]が、こちらは友人からの借金で、日本に数頭しかいないシェパードを購入している。狩猟は少年時代からの趣味だった[注9]らしい。八木一夫に語った「工面はこの人がしてくれましたので、貧乏には泣きませんでした。ただこの人の気ままにほとほと参りました」との夫人の言葉[注10]は、この辺りを指すのだろう。

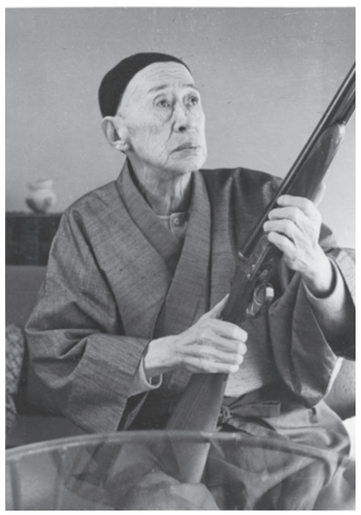
味にも喧（やかま）しかった。交流のあった南健吉から「どんな銘菓を供しても、満足しなかった」と聞いた。晩年に交流があった長唄三味線の人間国宝今藤長十郎は、祇園の料亭鳥居本（とりいもと）の5代目主人が鉢植えの茄子を切らずに、そのまま袋に仕込んだ糠（ぬか）で漬けてしまう浅漬けを作り、少数の客に出していたが、それを宗麿が好んだと書いている[注11]。贅沢の極みであろう。今藤は、一般にはほとんど知られていなかったフィンテックスの背広を宗麿が京都・河原町の洋服屋で念入りに仕立てさせ、しかも袖を通さなかったとも書いている。

これらの逸話は、昭和30年に人間国宝に認定され、大金が入る様になった晩年の10年間の話である。小山によると、金が入ると祇園で湯水の如く蕩尽（とうじん）し、無くなっても平然としていたという。可愛がっていた姪で彫刻家の阿部雪子に「金は仕事の滓（かす）」と語ったそうだ。

阿部によると一緒に橋本関雪宅を訪れ、立派な造りに見とれていると「感心するのは下らない人間だ。芸術には関係ない」と叱られたという。

こうした言動には金に執着しない、超俗の趣が感じられる。従って、嫌味がない。金があっても無くても、精神の贅沢を追及していた点で一貫しているからだろうか。昭和36年頃に記したと思しきスケッチブックに「ゼイタクを知らぬ者藝術家の素質に欠ける、知識のみの作家」のメモが残る。真実には違いなかろうが、自身への弁解の様にも受け取れるのが愉快である。

①



②

注1　拾った素麺を食った話。
「石黒宗麿さんのこと」（八木一夫『オブジェ焼き』収録、平成11年、講談社文芸文庫）
注2　売上は513円。
大原美術館初代館長武内潔貞日記の記述（同5月29日）
注3　親しい友人にこう喜びを書き送っている。
武内に宛てた同年6月1日消印の手紙。『石黒宗麿書簡集』収録。
書簡番号三七（平成18年、射水市新湊博物館）
注4　小山冨士夫が書いている。
「石黒宗麿 人と作品」（『石黒宗麿作陶五十選』収録、昭和47年、朝日新聞社）
注5　借金を肩代わりして呉れる人。
富山の売薬商田辺久松。小野公久『評伝石黒宗麿 異端に徹す』（平成26年、淡交社）
注6　家に戻れたそうだ。
小川時代の隣人梅沢柳平の話。同前
注7　英国製の猟銃だったという。
八木忠太郎「人間国宝陶聖 石黒宗麿先生をしのぶ（二）」
「SAITAMAMINRON」818号、昭和48年10月10日）
注8　小山も書いている。
前掲書
注9　少年時代からの趣味だった。
幼馴染の金蔵寺住職小松周昭が毛筆で記した「石黒宗麿伝」
注10　夫人の言葉。
八木一夫。前掲書
注11　宗麿が好んだと書いている。
今藤長十郎「人間石黒宗麿」
（『人間国宝シリーズ8 石黒宗麿 鉄釉陶器』（講談社、昭和56年）

①昭和42年1月25日、祇園にて。左奥は守屋篤太郎、中央が宗麿、右は小山冨士夫。
射水市新湊博物館提供
②愛用の猟銃を手にする宗麿。『淡交』昭和39年2月号掲載。淡交社提供

やきものでわくわく 浮世絵にうきうき

開館20周年記念特別企画展Ⅰ「東洋陶磁と浮世絵 ―館蔵名品選」

平成28年（2016）

9月10日 土 ～10月16日 日

休 館 日●10月3日［月］
開館時間●9：00 ～ 17：00（入場は16：30まで）
観 覧 料●一般 1,000円（800円）、70歳以上の方・学生 800円（600円）

※（　）内は前売りおよび20名以上の団体料金。18歳以下の方、および高等学校、中等教育学校、特別支援学校に在学する生徒は無料。
※身体障害者手帳、戦傷病者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳をご提示の方とその介護者（1名）は無料。
※普通展示（陶芸館展示室）をご覧になる場合は別途観覧料が必要。
※前売券は、ローソンチケット（Lコード62251）、セブンチケットおよび県内各プレイガイドでお求めください。

山口県立萩美術館・浦上記念館は、今年で開館20周年を迎えます。

当館は、萩市出身の浦上敏朗氏が東洋陶磁や浮世絵版画を中心とする美術品を山口県に寄贈したことを契機に、新しい芸術文化の発信拠点にふさわしい特色ある美術館として平成8年（1996）に開館しました。

本展では、浦上コレクションを出発点に、これまで内容の充実を目指して成長してきた東洋陶磁と浮世絵から選りすぐった作品を展示します。「赤富士」と呼ばれる浮世絵の名品、葛飾北斎の「富嶽三十六景 凱風快晴」。好奇心を刺激するリス形の把手や体いっぱいに物語を表現した朝鮮陶磁の名品「青花月兎文栗鼠耳角扁壺」など、普段ご覧いただくことのない構成で、やきものと浮世絵の新たな魅力を192点の名品とともにご紹介します。

どうぞ心ゆくまでお楽しみください。

主　　催／20周年記念展実行委員会
（山口県立萩美術館・浦上記念館、朝日新聞社、yab山口朝日放送）
後　　援／山口県教育委員会、萩市、萩市文化協会、萩陶芸家協会
特別協力／エフエム山口

①

②

関連イベント

ギャラリー・ツアー（担当学芸員による作品解説）
日 時●【浮世絵】
9月11日［日］・9月25日［日］・10月9日［日］
【やきもの】
9月18日［日］・10月2日［日］・10月16日［日］
各日、11:00 ～ 12:00
※要観覧券

こどもギャラリー・ツアー（担当学芸員による作品解説）
小学生以上を対象にした展示解説です。
もちろん、おとなの方も参加自由です！
よりわかりやすい展示解説を行います。
日 時●9月24日［土］11:00 ～ 12:00
【やきものと浮世絵】
※おとなの方は観覧券が必要

◆特別記念講演会も開催します。詳しくは、本誌裏表紙でご案内しております。

①青花月兎文栗鼠耳角扁壺　朝鮮時代　18 ～ 19世紀　②葛飾北斎　「風流無くてなゝくせ 遠眼鏡」　享和期（1801～1804)頃　大判錦絵

すみすり

開館20周年記念特別企画展Ⅱ「赤間硯の造形」

平成28年（2016）　　平成29年（2017）

10月18日 火 ～1月15日 日

休 館 日●10月31日［月］、11月7日［月］、11月21日［月］、12月12日［月］、12月26日［月］～1月1日［日・祝］
開館時間●9:00 ～ 17:00（入場は16:30まで）
観 覧 料●一般 300円(240円)、学生200円(160円)

※（　）は20名以上の団体料金。
※70歳以上および18歳以下の方と高等学校・中等教育学校・特別支援学校の生徒は無料。
※身体障害者手帳、戦傷病者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳の提示者とその介護者(1名)は無料。
主催…開館20周年記念特別企画展実行委員会(山口県立萩美術館・浦上記念館、朝日新聞社、yab山口朝日放送)

赤間関（下関市）でつくられたところから赤間関硯とも呼ばれる「赤間硯」は、その起源が鎌倉時代初期まで遡るとされる代表的な和硯です。江戸時代には、大森家が長府藩（藩の支藩）の御用硯師を務めるなど質的に高い水準の作硯技術を発達させ、実用的な書硯から文様彫琢を巧みに施した観賞硯まで幅広い制作がおこなわれました。このたびは、近世期赤間関硯の伝世品から下関や宇部で制作された現代の「赤間硯」までを展示して、その豊かな造形性を紹介します。

《松竹梅文長方硯》
17世紀
個人蔵

堀尾卓司
《赤間硯「すみすり」》
昭和54年（1979）
当館蔵

関連イベント ※要観覧券

❶ **アーティスト・トーク**（作家による作品解説）
堀尾 信夫 氏（硯作家、山口県指定無形文化財「赤間硯」保持者）
日時…11月27日［日］ 14:00 ～ 15:00
日枝 陽一 氏（硯作家）
日時…1月8日［日］14:00 ～ 15:00

❷ **ギャラリー・ツアー**（担当学芸員による作品解説）
日時…11月13日［日］、12月11日［日］11:00 ～ 12:00

夏の美人たち

普通展示（浮世絵）

会 期 ● 平成28年（2016）7月26日［火］～ 8月28日［日］

浮世絵の美人画は、遊女や芸者、水茶屋の評判娘など実在の女性が描かれたほか、一般女性の生活の中のふとした表情や仕草の美しさをとらえたり、時代ごとの理想的な美人像が描かれたりと、実にさまざまです。

今回は夏の美人たちをテーマに、浴衣姿での夕涼みといった夏の風情を楽しむ美人や、夕立のあわただしい情景を描いた作品などを紹介します。歌川国貞、国芳、広重、楊洲周延、伊東深水など、代表的な絵師による江戸から昭和初期にかけての美人画をお楽しみください。

歌川広重「東都名所 両国夕すゞみ」
弘化末期～嘉永初期（1847～1849）　大判錦絵3枚続

萩焼の細工物

普通展示（陶芸）

会 期 ● 平成28年（2016）5月10日［火］～ 10月16日［日］

彫刻によって人物・動植物などのモチーフを堀り出した彫像、あるいは彫像を取り付けた器皿類を細工物といいます。萩焼における細工物の制作は江戸時代中期頃から盛んになり、江戸後期に最盛期を迎えています。しかし、萩焼の基となった朝鮮半島系の技術の中に、細工物は見られません。

では、その初源はどこなのか。注目したいのは、京都の楽焼の存在です。16世紀後半から始まった楽焼では、早い段階から細工物が作られています。楽焼の高い技術に萩藩は注目し、元禄13年（1700）に初代三輪休雪が、延享元年（1744）に4代三輪休雪が、藩命によって京都に派遣され、作陶の修行をしています。これが萩焼で細工物が盛んとなる時期と同じであることを踏まえると、楽焼の技術を習得した三輪家によって萩焼に細工物が取り入れられたのではないかと推測することが出来ます。

萩焼の細工物は香炉、香合、置物など多岐に亘り、茶席や床の間飾りに使用されました。モチーフとしては人物や動物が多く採用され、道教の仙人や武将、獅子や鯉、狸など細緻かつダイナミックに表現されています。

今回は萩焼の作陶の技巧が光る、萩焼の細工物について紹介します。

三輪喜楽（六代休雪）萩狸置物　江戸時代後期　高さ34.3cm　寄託品

平成28年度（7月～9月）日程表 Schedule

2016

7

- 普通展示（浮世絵） 木版画家 立原位貫（~7/24）
- 普通展示（東洋陶磁） 明時代陶磁器の魅力（~8/28）
- 普通展示（陶芸） 陶質のエロス 十二代三輪休雪の世界（~2017/3/5）
- 普通展示（陶芸） 萩焼の細工物（~10/16）
- 特選鑑賞室 二代歌川広重 名所江戸百景 赤坂桐畑雨中夕けい（7/1~7/31）
- 茶室 清野耕一展 Cultivation / Between Heaven and Earth（培養体／天と地の間）（~2017/3/26）
- 特別展示 最初の人間国宝 石黒宗麿のすべて（7/2~8/28）
- 普通展示（浮世絵） 夏の美人たち（7/26~8/28）

GT　東洋陶磁

8

- 普通展示（浮世絵） 夏の美人たち（~8/28）
- 普通展示（東洋陶磁） 明時代陶磁器の魅力（~8/28）
- 普通展示（陶芸） 陶質のエロス 十二代三輪休雪の世界（~2017/3/5）
- 普通展示（陶芸） 萩焼の細工物（~10/16）
- 特選鑑賞室 歌川広重 名所江戸百景 両国花火（8/1~8/28）
- 茶室 清野耕一展 Cultivation / Between Heaven and Earth（培養体／天と地の間）（~2017/3/26）
- 特別展示 最初の人間国宝 石黒宗麿のすべて（~8/28）

展示替えのため休館

GT　浮世絵　GT　陶芸　GT

9

展示替えのため休館

※普通展示（浮世絵）、（東洋陶磁）の展示室は、特別展示会場として使用します。

- 普通展示（陶芸） 陶質のエロス 十二代三輪休雪の世界（~2017/3/5）
- 普通展示（陶芸） 萩焼の細工物（~10/16）
- 特選鑑賞室 歌川広重 名所江戸百景 猿わか町よるの景（9/10~9/30）
- 茶室 清野耕一展 Cultivation / Between Heaven and Earth（培養体／天と地の間）（~2017/3/26）
- 特別展示 やきものでわくわく 浮世絵にうきうき 開館20周年記念特別企画展Ⅰ「東洋陶磁と浮世絵一館蔵名品選」（9/10~10/16）

記念講演会　GT　記念講演会　GT　記念講演会　GT　GT

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

休館日　ギャラリー・トーク　ギャラリー・ツアー　記念講演会　イベント

★イベント

ワークショップ「わたしの"ちょるる"」―鋳込み成形と上絵付け（参加無料／事前申込制）
- 日　時●8月6日［土］、8月7日［日］　①10:00～11:30 ②13:00～14:30
- 場　所●多目的室
- 定　員●各回16名（小学生以下の方は保護者同伴）

アート・フェスティバル2016
子どもから大人まで楽しめるワークショップなど無料イベントが盛りだくさん!
- 日　時●8月13日［土］

■記念講演会（聴講無料／当日受付先着順）

いずれも講座室（座席数84席）にて行います。

「やきものでわくわく 浮世絵にうきうき」展
- 日時●9月10日［土］13:30～15:00
  講師●伊藤 郁太郎 氏（大阪市立東洋陶磁美術館名誉館長）
  演題●芸術の愉しみ
- 日時●9月17日［土］13:30～15:00
  講師●佐藤 光信 氏（公益財団法人 平木浮世絵財団常務理事）
  演題●充実する浦上記念館の収集と活動
- 日時●9月22日［木・祝］13:30～15:00
  講師●西田 宏子 氏（公益財団法人 根津美術館顧問）
  演題●朝鮮と中国のやきもの コレクター浦上氏とそのコレクションの魅力
- 日時●10月1日［土］13:30～15:00
  講師●小林 忠 氏（岡田美術館館長、学習院大学名誉教授）
  演題●浮世絵の魅力

●ギャラリー・ツアー（担当学芸員による特別展示作品解説）

いずれも11:00～12:00

「最初の人間国宝 石黒宗麿のすべて」展
- 7月17日［日］、8月7日［日］、8月21日［日］、8月28日［日］

「やきものでわくわく 浮世絵にうきうき」展
- 浮世絵●9月11日［日］、9月25日［日］　やきもの●9月18日［日］
- こどもギャラリー・ツアー●9月24日［土］※小学生以上を対象とした解説を行います。

■ギャラリー・トーク（担当学芸員による普通展示作品解説）

いずれも11:00～（30分程度）
- 7月23日［土］　明時代陶磁器の魅力
- 8月13日［土］　夏の美人たち
- 8月27日［土］　萩焼の細工物

※イベント詳細については美術館ホームページをご覧ください。　※ギャラリー・ツアー、ギャラリー・トークへのご参加には観覧券が必要です。

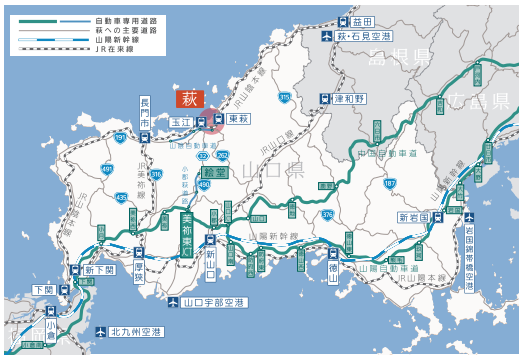
■交通アクセス

［新山口駅から］
- 直行バス「スーパーはぎ号」（約60分）で萩・明倫センター下車。徒歩約5分。
- 防長バスまたは中国JRバス（約70～95分）で萩バスセンター下車。徒歩約12分。

［山口宇部空港から］［萩・石見空港から］
- 萩近鉄タクシー（乗合タクシー）約70～80分。（利用前日までに要予約）

［JR山陰本線］
- JR萩駅から萩循環まぁーるバス（西回り）約30分。
- JR東萩駅から萩循環まぁーるバス（東回り）約30分。
- JR玉江駅から徒歩約20分。

［自動車］
- 「中国自動車道」美祢東JCT経由、「小郡萩道路」絵堂ICから約20分。
- 「山陰自動車道」三見ICから約10分、国道191号沿い。



山口県立萩美術館・浦上記念館
HAGI URAGAMI MUSEUM
〒758-0074　山口県萩市平安古町586-1
TEL0838-24-2400　FAX0838-24-2401
URL　http://www.hum.pref.yamaguchi.lg.jp/
Find us on Facebook

季刊「萩」平成28年7月15日通巻第80号　●発行／山口県立萩美術館・浦上記念館　●山口県萩市平安古町586-1